

波佐見くらわんか茶碗のひろがり

中野雄二（波佐見町教育委員会）

1 はじめに

長崎県の波佐見町内、江戸時代は大村藩に属した上波佐見村・下波佐見村内の諸窯で、とくに18世紀～19世紀前半にかけて生産された厚手の磁器製品は、一般に「くらわんか茶碗」もしくは「くらわんか手」と称されている。2009年9月12日、筆者は「波佐見くらわんか茶碗のひろがり」の題で、石川県珠洲市で開催された公開フォーラム『能登の海と海底に沈む歴史』において発表を行い、波佐見製品の生産状況・流通と消費・能登との関連、以上の3点を中心に概述した。本稿は、この3点を軸に多少の肉付けを行い、発表内容をまとめ直したものである。なお、波佐見における18世紀以降の庶民向け磁器製品の呼称について、「くらわんか茶碗」では碗形製品のみに限定したイメージを与えるおそれがあるため、以下、製品全体を包括する「くらわんか手」と表記する(1)。



Figure 1 波佐見町・三越浦・伊万里・岡垣浜位置図

2 「くらわんか手」の生産

波佐見窯業は16世紀末～17世紀初頭の陶器生産で幕を開ける。17世紀前半代には磁器生産に転換、とくに青磁の優品を多く産し、17世紀後半代は東南アジア向けを主体とする海外輸出品を生産した。以上のような流れを経て、17世紀末～18世紀初頭に波佐見では国内向けの安価な日用食器、いわゆる「くらわんか手」の生産を開始する(中野 2008b pp. 46-57)。



Figure 2 波佐見町内関連遺跡分布図

2-1 「くらわんか手」のはじまり

波佐見町内(以下「町内」とする)皿山地区高尾窯の発掘調査では、失敗品の捨て場である「物原」の堆積において、層の下位から上位に向かって、海外輸出品である雲龍見込み荒磁文碗を主体とする層、国内向け染付碗が増加する層、国内向け製品のみ層、という変遷が確認されている。また、この国内向け製品のみ層から出土した染付碗には、手描きではなくプリントである「コンニャク印判」装飾(Figure3-1)、また、重ね焼きを行うために見込みをドーナツ状に釉剥ぎした「見込み蛇の目釉剥ぎ」(Figure3-2)など、下位の層には見られない「量産」の具体的な様相を示す手法が認められた(中野 1996)。

「国内向け」であること、「量産」から推測される製品の「安さ」、また、その安さから導かれる「一般庶民層への普及」、これらの諸要素を内包する磁器製品をもって「くらわんか手」とするならば、上述した高尾窯跡における国内向け製品のみ層から出土したものを「くらわんか手」の初源的な製品とひとまず考えても良いだろう。ただし、「量産」が「安さ」に果たして直結するものか、「安さ」という相対的な基準をどう捉えるか、「一般庶民層」とは具体的にどのような人々を示すかなど、この「くらわんか手」の前提条件については別にあらためて議論していく必要がある(2)。

さて、肥前における海外輸出品生産の減退及び国内向け製品生産開始の引き金となったのは、中国における鎖国令の廃止－「展海令」であり、その公布年は1684年である。そして、上述の高尾窯における「く

「くらわんか手」の初源的製品の出現年代については、文献の記録等を加味し 1680 年代～ 1690 年代と想定している（中野 1998 p. 43）。このように、高尾窯では、中国の「展海令」公布とほぼ同時期に製品様相が変化しており、市場動向に対し鋭敏に反応して生産体制を再構築していた状況が窺われる。また、江戸期の文書資料である『皿山旧記』に記された元禄 10 年（1697）開窯の町内村木地区の百貫西窯物原最下層に海外輸出品は含まれておらず（宮崎・村川 1993）、同文書にみる貞享 2 年（1685）開窯の町内中尾地区の大新登窯において物原発掘・採集品に海外輸出品が発見されていないこと（中野 2006）などを踏まえると、1680～90 年代において、海外輸出品から国内向け製品いわゆる「くらわんか手」生産へ、波佐見窯業全体が速やかにその生産体制を切り替えていったことが推測される。

2-2 18 世紀前半代の様相

18 世紀前半代に操業していた窯の中で、発掘調査によってその様相が明らかになった窯には、上述の高尾窯・百貫西窯、そして、町内井石地区の長田山窯（中野 1997）があげられる。まず製品について、高尾窯では「くらわんか手」の染付丸形碗（Figure3-3）を主体としているが、百貫西窯では「くらわんか手」染付丸形碗（Figure3-4）も含むものの、陶質素地に白化粧しその上に染付を施した「陶胎染付」の碗（Figure3-5）が量産されており、また、隣接する佐賀県有田町棕呂谷窯の製品と類似する上手の染付皿（Figure3-6）なども散見された。長田山窯においては、上手の青磁及び青磁染付皿から下手の青磁皿・香炉（Figure3-7）、陶胎染付碗・「くらわんか手」染付丸形碗へと、操業期間中に主体製品を替えながら生産していたことが判明している。続いて窯体全長については、高尾窯が 100m ほど、百貫西窯が約 36 m、長田山窯が最大 50 m ほどと推測されている（中野 2004a p. 63）。

3 基いずれも基本的に庶民向けの「くらわんか手」の生産を行っており、その器種は碗・皿が主体、碗の器形についてはほぼ丸形に限られることが判明している。ただし、上述のように、百貫西窯の陶胎染付碗・上手の染付皿、長田山窯の上手の青磁皿など、窯によってその製品様相は異なりを見せている。また、上手の製品の存在は、富裕層への供給を意図した製品づくりも行われていたことを示唆している。窯体全長に関しては、巨大な高尾窯、小・中規模の百貫西窯・長田山

窯と規模はまちまちであり、これはそのまま各窯における量産指向性の強弱を示すのであろう。

以上のように、18 世紀前半代の波佐見窯業は、窯毎にそれぞれの「個性」が表出しており、生産体制においては、器形が限られた「少品種」の、且つ、「窯単位」の大量生産体制であったとまとめることができる（中野 2004a p. 64）。

2-3 18 世紀中葉以降の様相

18 世紀中葉以降、波佐見窯業は前代とは大きく異なる様相を見せる。町内皿山地区の皿山本登窯（中野 1999）、永尾地区の永尾本登窯（宮崎・村川 1993）、中尾地区の中尾上登窯（宮崎・村川 1993、中野 2008a）などの調査事例から、製品については、依然、碗・皿を主体とするものの、仏花瓶（Figure3-16）・徳利（Figure3-17）をはじめ多様な器種が見受けられ、器形について、とくに碗では、丸形（Figure3-10）に加えて筒形（Figure3-11）・望料形（Figure3-12）・朝顔形（Figure3-13）・広東形（Figure3-14）・端反形（Figure3-15）など様々な形状のものが登場し、言わば「多品種」の様相を呈するようになった。ただ反面、個々の窯の製品内容は基本的に均一的となり、前代で見たような突出した「個性」を有する窯は見られなくなる。また、前代までと比べ、製品の器壁はぶ厚くなり、そして、素地は前代の白色・淡灰白色のものより灰白色・暗灰白色のものが一般的となる。器壁を厚くしたことは、薄手の製品よりも成形が容易であり数を多く作ることができる、また、焼成の際、高温により器が変形するリスクを少しでも減らすためであろう。素地が灰白色の傾向を強める点については、良質の陶石が少なくなったこと、生産量の増大に伴い質の悪い陶石も使用せざるを得なくなったこと、更に、生産スピード優先のため、陶石から陶土への精製である「水ひ」において不純物を除去する工程を省略していったこと、などが想定される。器壁と素地の変化の要因について確固たる結論は未だ出せていないが、ただ、いずれにしても、生産において質よりも量を重視するようになった結果が反映しているとみてよいだろう。

焼成の際に用いられる窯道具及び窯積み法についても 18 世紀中葉以降で大きな変化が認められる。18 世紀中葉頃、「タコハマ」と呼ばれる十字形の窯道具と、支脚となる棒状の道具を立体的に組み立てて焼成する「天秤積み」という窯積み法が出現する。それまで

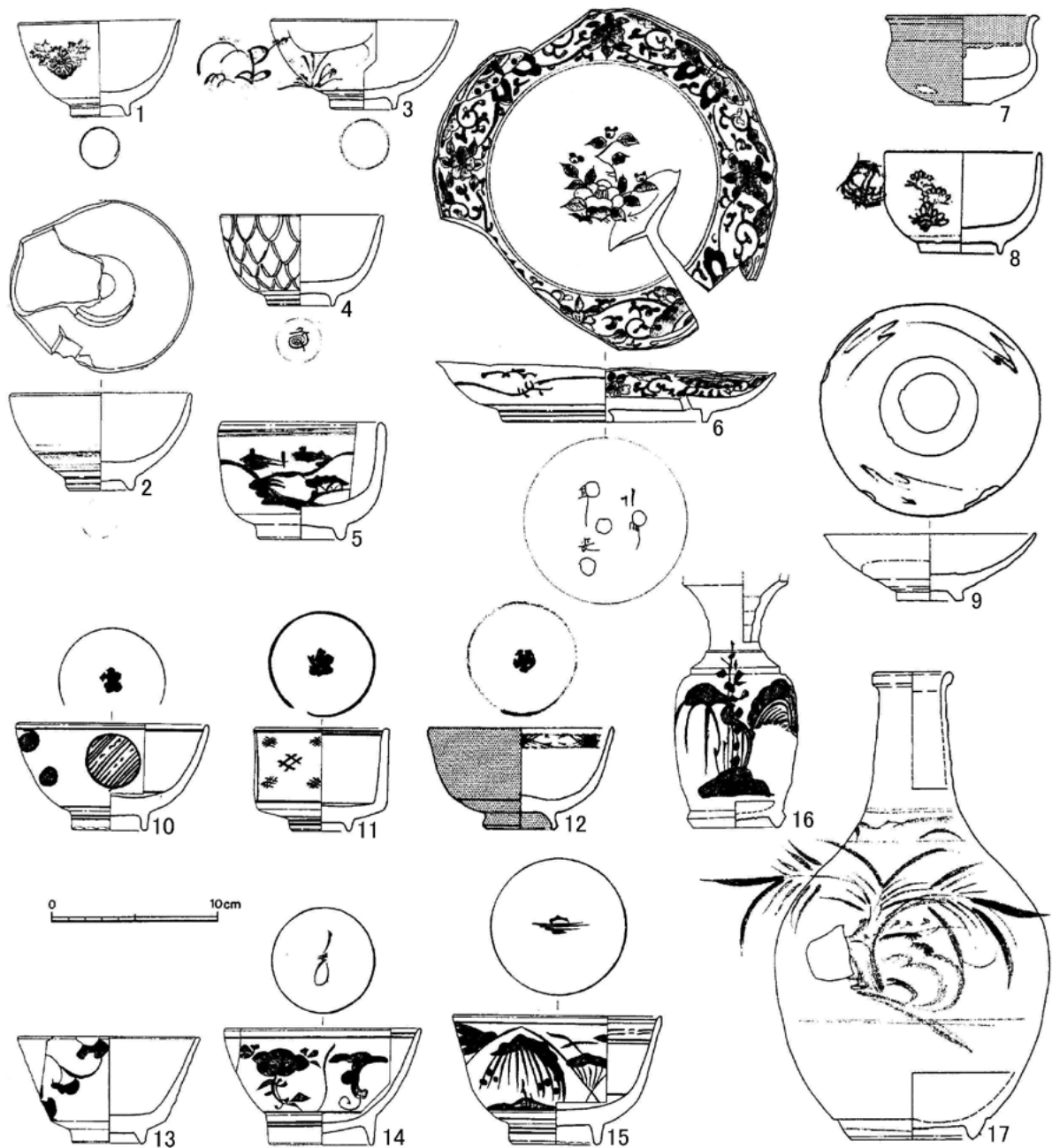


Figure 3 波佐見「くらわんか手」製品 (S=1/4)

- 1～3：高尾窯（中尾中野 1996）、4～6：百貫西窯（宮崎・村川 1993）、7～9：長田山窯（中野 1997）
 10・15：永尾本登窯（宮崎・村川 1993）、11・13・14：三股新登窯（宮崎・村川 1993）
 12：皿山本登窯（中野 1999）、16：中尾上登窯（宮崎・村川 1993）、17：三股新登窯（中野 2004b）

の窯積みは製品を窯室内の床面上に平面的に並べるものであったが、天秤積みは窯道具を組み立てることによって窯室内の空間をも積極的に活用する窯積み法であり、その結果として、焼成点数を飛躍的に増大させることになる。この天秤積みは、18 世紀後半代以降、

窯道具を洗練させながら波佐見全体に浸透していった。

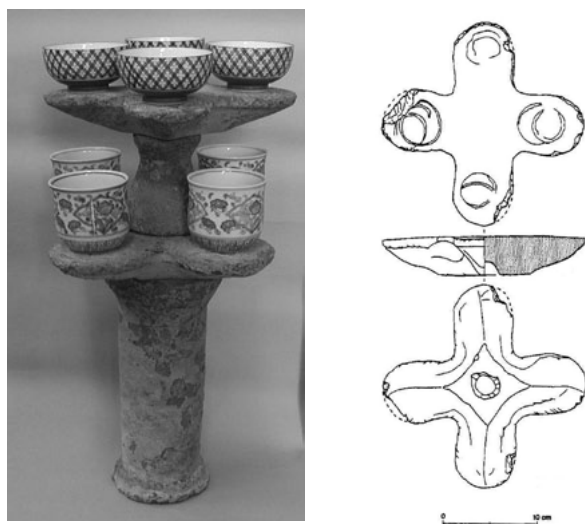


Figure 4 タコハマと天秤積み復元写真
タコハマ：大新登窯（中野 2006）S=1/8

窯の規模については、文書資料の検討から、18 世紀中葉から後半にかけて、波佐見全体で齊一的に窯の巨大化が図られ、18 世紀末には全長が 100m を越える巨大窯が普遍的に存在していたと考えられる（中野 2004a p. 63）。また、安政 3 年（1856）頃の記録をまとめた『郷村記』（藤野編 1982）及び調査成果の検討（宮崎・村川 1993 など）によって、窯室数 39 室・全長約 170m に及ぶ世界最大規模の大新登窯、窯室数 33 室約 160 m の中尾上登窯をはじめ、当時の波佐見において、全長 100m 以上の巨大な登窯が 8 基同時に稼働していたことが判明している（Table1）。そして同じ『郷村記』によれば、安政 3 年頃、これらの窯から年間 48,446 俵ものやきものが産み出されていたとの記録が残されている。一俵あたり何個のやきものが詰められていたかは不明であるが、当時の波佐見で年間に数十万個を越えるやきものが産み出されていたことは間違いあるまい。

地区 古文書での名称	現在の窯跡名	窯室数	窯全長	戸数	窯機数	年間やきもの 生産量	年間 使用本数	磨臼数
三股地区		計68室		108軒	26人	13,230俵	1,378,000本	110丁
上登窯	三股上登窯跡	23室	115m					
下登窯	三股下登窯跡	24室	120m					
新登窯	三股新登窯跡	21室	105m					
水尾地区		計29室		44軒	10人	6,620俵	627,000本	40丁
水尾山	水尾本登窯跡	29室	155m					
中尾地区		計98室		150軒	26人	21,960俵	2,056,000本	150丁
上登窯	中尾上登窯跡	33室	160m					
下登窯	中尾下登窯跡	26室	120m					
大新登窯	大新登窯跡	39室	160m以上					
榑木地区		計20室		66軒	12人	6,630俵	840,000本	27丁
榑木山	榑木本登窯跡	20室	100m					

*「現在の窯跡名」と「窯全長」は、筆者の推定。

Table 1『郷村記』に見る安政年間頃の波佐見窯業

以上のように、18 世紀中葉以降の波佐見窯業は、

製品においては、器種・器形は豊かで「多品種」となるが、質よりも量を重視する傾向が強まり、更に、窯における製品内容の「没個性化」が進む。また、生産体制においては、量産に拍車をかける窯道具・窯積み法の採用や窯体規模の巨大化が波佐見全体で齊一的に進行していった。つまり、この段階の波佐見窯業は、前代の「窯単位」ではなく、波佐見全体という一つの「窯業圏単位」で磁器大量生産体制が確立・発展していったとまとめられるであろう（中野 2004a p. 64）。

3 「くらわんか手」の流通と消費

前章で、波佐見における「くらわんか手」の成立と 18 世紀前半代及び 18 世紀中葉以降の大まかな様相を述べた。次に問題となるのは、この波佐見「くらわんか手」が、いつ、どこに、どのような経路で運ばれ、いかなる人々に使用されていたか、という流通や消費の実態を把握することである。この取り組みは、波佐見窯業史のみならず近世代における様々な文化史を明らかにするために重要であることは言うまでもない。しかし、「くらわんか手」の流通を具体的に指し示す資料は筆者の手元に少なく、逆に、消費に係わる資料に関しては、後述する全国消費地遺跡の調査事例を見るように、非常に膨大で筆者は未だに充分消化できないでいる。このように「くらわんか手」の流通と消費に関して、現在のところ、筆者はその具体像を描き出すまでには到底至っていないため、ここでは雑駁な概観を示すに留めておく。

3-1 流通の様相

18 世紀以降の波佐見「くらわんか手」の流通に関して、積み出し港については、二つの港が知られている。一つは、波佐見から南西に約 15 km 離れた、同じ大村藩領の川棚村^{かわたな}に所在する大村湾に面した三越浦^{みつごえうら}（長崎県川棚町）（Figure1）、いま一つは、波佐見から北約 20 km 離れた、玄界灘に面する伊万里湾の奥に位置する佐賀藩領伊万里津^{いまり}（佐賀県伊万里市）（Figure1）である。

まず、三越浦であるが、この港が波佐見製品の積み出し港として機能していたことやその具体的な姿を伝える文書は管見するところ見当たらず、それを示唆する文言や伝承が僅かに残るのみである（3）。口伝によれば、波佐見から馬で運ばれてきたやきものを、いったん大村藩のやきもの取り扱い所である川棚村

の「^{はらだ}原田役所」(4)に納めた後、荷船で三越浦に運び、そこから他所へ積み出していたとのことである(喜々津 1980 pp. 231-233)。三越浦にはやきものを収納する蔵屋敷もあったらしい。その後、「くらわんか手」を舶載し三越浦を出帆した船が、どういう人の手でどこに向かっていったかについての記録をはじめ、「くらわんか手」の流通経路等を伝える大村藩側の公・私的文書は今のところ発見されておらず、その実態は謎のままである。

次に、伊万里津については、天保6年(1835)に記録された『伊万里歳時記』『伊万里積出陶器荷高国分』の、佐賀藩領外から運ばれ伊万里津から積み出された「旅陶器」の記載中に「大村領破(波)佐見」が見え、それによると、天保6年頃に30,700俵の波佐見製品が伊万里津から積み出されていた事が分かる(前山 1990 p. 364)。なお、波佐見から伊万里津までのやきもの運搬手段の記録は残されていないが、川棚の三越浦までと距離的に大差ないことから、基本的に陸路を馬で運んでいったとみるのが自然であろう。そして、伊万里津から積み出された波佐見の「くらわんか手」は、筑前・紀州商人をはじめ多くの商人らの手を経て、基本的に「伊万里焼」の名称で全国中に広く運ばれていく(前山 1990)。

このように、文書資料から追える波佐見「くらわんか手」の確実な足取りは伊万里津までであり、そこからは、「波佐見」の文字は完全に消え、「伊万里焼」の「下手物」の一つとして全国に流れていく。よって、波佐見の「くらわんか手」が実際にどのような経路をもって消費地に運ばれていったかを解明する上で、文書資料のみのアプローチでは非常な困難を伴うであろう。しかし、次に述べるように、「流通の痕跡」とも言えるあるモノを通して、流通の具体像を推し量ることは可能である。

港から積み出されたやきものであるが、輸送途中、不幸にも船の難破や積荷の投棄によって海中に没したやきものも多い。今もその多くは海底深く眠ったままであろうが、沿岸部に打ち上げられたり、偶然漁師の網に掛かったり、またはダイバーによって取り上げられ、再び日の目を見たやきものがある。これらいわゆる「海揚げり」のやきものは全国各地で報告されているが、とくに福岡県遠賀郡岡垣町の岡垣浜(Figure1)へ漂着した様々な資料の中には膨大な波佐見「くらわ

んか手」を見ることができる。なお、これらの漂着資料は、1970年代末から今日まで約30年にわたり岡垣町在住の添田征止氏によって採集されてきたものであり、様々な時代・産地の陶磁器が多数含まれている(5)。この貴重な資料に早くから注目し(野上 1998 pp. 1-26)、資料の紹介と分析をされてきた野上建紀氏によれば、岡垣浜漂着の近世肥前陶磁器については、「17世紀が最も少なく、17世紀末より増加し、18世紀、19世紀と年代が下がるにつれて量が多くなっている」、また、「18世紀後半になると、さらに製品の量は増える。いわゆる「くらわんか碗・皿」と呼ばれる粗製の碗・皿が数多く見られる。」とされ、さらに、このような現象と筑前商人の活動との関連についても言及されている(尾崎・北村・野上編 2009 pp. 8-9)。

3-2 消費の様相

波佐見「くらわんか手」の消費地遺跡における諸様相については、これまで報告された多数の事例及び先学による多くの研究成果を通して(6)、現在、筆者が理解及び想定していることがいくつかある。以下述べていくが、上述のとおり筆者の中では未だ充分にまとまっていない点が多いため、今後、様々なご意見・ご批判をいただければ幸いである。

波佐見の「くらわんか手」磁器製品は、江戸時代における全国中の多数の消費地遺跡で報告されている。遺跡の件数及び遺物の出土点数はあまりの膨大さに把握できていないが、江戸期、とくに18世紀以降の遺跡を調査すれば、遺跡から推察される当時の生活者の階層性を問わず、かなりの高い確率でこの「くらわんか手」が出土してくるようである。また、ある特定の地域への偏在も認められない。これらのことから、波佐見の「くらわんか手」は、基本的に全国中あまねく運ばれ、そして、当時の庶民層を中心としつつも他の階層、例えば武家階級の中においても、日常使いの器として広く使用されていたことが想定される。しかしそうは言っても、波佐見「くらわんか手」の生産が開始された17世紀末から、全国で一律一斉にこの器が普及・使用されていたのでは勿論なく、その全国的な波及にはいくつかの段階があったと考えられる。この波及の流れについては、今のところ大雑把であるが次のように考えている。

17世紀末から18世紀前半代にかけて、種々の技術革新に伴う農村経済の質的転換、海上輸送をはじめ国

内交通網の整備、新興商人の台頭などを背景として（大石 1993）、「庶民」の経済・文化が著しく発展を遂げる。この段階の「庶民」は大規模な都市部の住民、中でも富裕層が中心であり、彼らが最初の波佐見「くらわんか手」の主要な需要層であった。

18 世紀中葉以降、とくに 18 世紀中葉～後半代、地方商人の台頭による新たな商品物流システムや流通網の展開及び貨幣経済の全国的な浸透（藤田ほか 1978）は、大都市における住民に加え、地方における中・小規模都市住民による「くらわんか手」の使用を常態化させる。さらに、19 世紀以降、その拡大傾向は不可逆的に進行して、国内のあらゆる地域・社会にまで「くらわんか手」が行き渡り、日用品としての磁器製品の位置づけは、全国的に普遍的なものとして定着化する。前章で見た生産地波佐見における 18 世紀中葉以降の量産体制の深化、19 世紀中葉の巨大窯の稼働状況は、以上の流れを傍証する証左の一つとなるのではないだろうか。

しかし、当然、実際の全国への波及については、このように単純で直線的なベクトルで示せるわけではなく、地理的・気候的環境、藩の政策、在地の窯業の有無、主要な生業、貨幣経済の浸透度、情報伝達度、食文化、因習などをはじめとする多様な因子が加わり、実態は極めて複雑なものであったとみられる。よって、全国における波佐見「くらわんか手」の消費の様相を明らかにしていく上で、この複雑で多様な因子を解きほぐす作業が必須となるため、全貌を提示できるには今後相当な時間が要されるであろう。ただ逆に、例えば、ある地域と地域間における同種の「くらわんか手」の時間的・空間的な出土傾向を分析・比較することで、地域が有する多様な因子の一つ、つまり地域的な特性を抽出していくことは充分可能と思われる。波佐見「くらわんか手」の消費に関する研究は、全国展開したことによる難しさを持つと同時に、全国展開したゆえに近世社会を構成した多様な側面を浮かび上がらせる可能性も有していると言えよう。

4 能登半島と「くらわんか手」

筆者は 2009 年 6 月 7 日から 9 日にかけて、金沢大学・アジア水中考古学研究所・珠洲焼資料館・日本海域水中考古学会による共同調査である珠洲市沿岸部の分布調査に参加した。その際、珠洲市沿岸部を踏査し

波打ち際に漂着した陶片類を採集するとともに、珠洲市ご在住の枅谷秀一氏が長年にわたり近くの海岸で採集された多数の陶磁器片を分類する作業に少し携わった。その詳細については刊行された概報（佐々木ほか 2010）に譲るとして、ここでは、とくに枅谷氏採集陶磁器の中で波佐見産と想定される「くらわんか手」の様相と、それから波及される事々について若干述べてみたい。

枅谷氏採集資料の中で、近世陶磁器は肥前陶磁が大多数であり、その中でもとくに波佐見産と考えられる資料が多かった。波佐見製品には 17 世紀中葉頃の見込み蛇の目釉剥ぎ・高台部無釉の青磁皿、18 世紀前半代の染付碗や 18 世紀前半～中葉頃の染付皿も確認されたが、その点数は少なく、基本的に 18 世紀中葉以降の染付碗・皿が最も多く見られた。

このように、珠洲市の採集資料において 18 世紀中葉以降の「くらわんか手」が他の時期よりも点数的に卓越していることは、2 章で述べたような生産地波佐見における様相、また、前章の流通で触れた福岡県岡垣町岡垣浜での様相と一致をみており、「くらわんか手」の生産量の増大、それに伴う流通量の増大が、能登半島の珠洲においても現象として認められると言えるであろう。ただし、この採集資料については、近隣の集落において使用後、川や海へ廃棄され、その後海岸に流れ着いたものか、また、流通途上で破船等により沈んだものが漂着したものなのか、その性格は不明である。この点については、珠洲市近隣の消費地遺跡の調査で出土した「くらわんか手」、また、沖合の水中で発見された確実に輸送途中のものと判断できる「くらわんか手」、これらと上述の採集品との比較・検討を通して、結論づけていくしか方法はあるまい。

以上のように、枅谷氏採集品は、その性格は明白ではないものの、波佐見「くらわんか手」については 18 世紀中葉以降が最も多いという、生産地波佐見と流通途上の岡垣浜の状況と連動した様相を呈していることが判明した。今後、採集品について更なる詳細な調査・研究を通して事実を解き明かしていくことも勿論重要であるが、かつて海上輸送による大量物流の幹線路に面していた能登半島の状況や、江戸時代の人々の様々な営みを伝える資料として、さらには、近世と現在、珠洲と波佐見をつなげるものとして、枅谷氏の採集品が多くの人々の目に触れ、様々な場で活用され

ていくことを強く願っている。

5 おわりに

以上、発表内容をもとに、波佐見「くらわんか手」の生産、流通・消費、能登半島珠洲における状況、この3点を基軸にして概述した。稿を進めながら、波佐見の「くらわんか手」について、自分自身理解していないことや不勉強な点が多いことに愕然とするとともに、とくに、流通の実態を示唆する「海揚げり」の資料、並びに、水中考古学的重要性・将来性を強く感じた。今後、窯業技術の変遷・製品の様相把握等という「生産」に、「流通」及び「消費」の観点を積極的に絡めながら、「くらわんか手」をはじめとする波佐見のやきものをより総合的に究明していきたいと考えている。

最後になりましたが、筆者の遅筆につき、多くの方々に多大なご迷惑をおかけいたしました。この場を借りて深くお詫び申し上げます。

註

(1) 「くらわんか手」の製品は波佐見のみで生産されたものではないが、本稿では波佐見の製品として考えていただきたい。

(2) 17世紀中葉から後半代にかけて、波佐見諸窯を中心に高台部無釉で見込み蛇の目釉剥ぎした染付・青磁皿が大量に生産されている。これも「くらわんか手」の範疇で捉えて良いのか、つまり、この段階の製品の場合、「量産」＝「安さ」＝「一般庶民向け」が成り立つのかを考えなければならない。

(3) 喜々津文献 p. 229 に、文書『元々所諸願控』からの引用として「三越浦の儀前方より焼物其他向々相当の品買上げなし仕り…」とあり、三越浦とやきものとの関連を示唆する文言が見られる。なお、『元々所諸願控』がどのような文書でどこに所在するか、現在、筆者は確認できていない。

(4) 原田役所については、『郷村記』に以下の記述がある。「一原田役所 當役所造立の年間由緒不詳、先年波佐見皿山陶器俵物取計として、皿山役所より建し所と云」（藤野編 1982 pp. 230-231）

(5) 添田征止氏の webpage を紹介する。

『浜辺の達人の漂着陶磁器』（<http://www.geocities.jp/ssicd07132/>）

(6) 全国の消費地遺跡における「くらわんか手」をはじめとする庶民向け陶磁器の諸様相を網羅的・詳細にまとめたものとして、近年では2006年以降の九州近世陶磁学会による一連の成果が挙げられる。参考として文献欄にあげておきたい。

文献

大石慎三郎 1993『元禄時代』 岩波書店

尾崎葉子・北村都・野上建紀編 2009『海揚げりの有田焼一筑前岡垣浜を中心に一』 有田町歴史民俗資料館・アジア水中考古学研究所

喜々津健寿 1980『大村藩の産業経済史』 pp. 171-240 芸文堂

九州近世陶磁学会編 2006『江戸後期における庶民向け陶磁器の生産と流通（九州編）－第16回九州近世陶磁学会資料』 九州近世陶磁学会

九州近世陶磁学会編 2007『江戸後期における庶民向け陶磁器の生産と流通（中国・四国・関西編）－第17回九州近世陶磁学会資料』 九州近世陶磁学会

九州近世陶磁学会編 2008『江戸後期における庶民向け陶磁器の生産と流通（東海・北陸・甲信越編）－第18回九州近世陶磁学会資料』 九州近世陶磁学会

九州近世陶磁学会編 2009『江戸後期における庶民向け陶磁器の生産と流通（関東・東北・北海道編）－第19回九州近世陶磁学会資料』 九州近世陶磁学会

佐々木達夫・小川光彦・酒井中・垣内光次郎・九千房百合・塩澤隆慈・田崎稔也・松井広信・渡邊玲・ナンチー・カイ・坂本圭佑 2010「日本海海域における水中文化遺産調査概報－平成21年度－」『金沢大学考古学紀要』第31号 pp. 106-147 金沢大学人文学部考古学研究室

中野雄二 1996『Ⅰ高尾窯跡 Ⅱ岳辺田郷圃場整備に伴う確認調査』 波佐見町教育委員会

中野雄二 1997『長田山窯跡』 波佐見町教育委員会

中野雄二 1998「17世紀末から18世紀初頭の波佐見窯業」『研究紀要』第7号 pp. 33-45 有田町歴史民俗資料館・有田焼参考館

中野雄二 2000「波佐見」『九州陶磁の編年』 pp. 254-289 九州近世陶磁学会

中野雄二 2004a「18世紀中葉～19世紀中葉の波佐見窯業について」『金沢大学考古学紀要』第27号 pp. 50-69 金沢大学文学部考古学講座

中野雄二 2004b『三股新登窯跡』 波佐見町教育委員会

中野雄二 2006『大新登窯跡』 波佐見町教育委員会
中野雄二 2008a『中尾上登窯跡』 波佐見町教育委員会
中野雄二 2008b「近世波佐見焼の歴史」『海路』第6号
pp. 46-57 海鳥社
野上建紀 1998「海揚がりの肥前陶磁—玄界灘沿岸を中心に—」『研究紀要』第7号 pp. 1-26 有田町歴史民俗資料館・
有田焼参考館
藤田貞一郎・宮本又助・長谷川彰 1978『日本商業史』 有
斐閣
藤野保編 1982『大村郷村記』第三巻 pp. 144-385 国書刊
行会
前山博 1990『伊万里焼流通史の研究』 自費出版
宮崎貴夫・村川逸朗 1993『波佐見町内古窯跡群調査報告書』
波佐見町教育委員会
(e-mail: yuji-nakano@town.hasami.lg.jp)

『金大考古』投稿規程

1. 原稿は e-mail で編集委員に送る。
2. 校正は編集委員及び執筆者が校了を同意するまで行う。
3. 査読は編集委員2名を以て行なう。
4. 原稿の著作権は著者に属す。ただし、電子データ等の公開権利は金沢大学及び金沢大学考古学研究室が有する。

『金大考古』執筆要項

1. 原稿の書式
文字版面は、A4 版横書きで、24 字×42 行の横2段組。
余白は天 30 ミリ地 27 ミリ左 22 ミリ右 22 ミリ。ヘッダー
には「金大考古 号数、発行年 筆者・論文名・ページ数」、
フッターにはページ番号をつける。
2. 書体
論文タイトル・著者名・見出しは MS ゴシック、本文テキ
ストは MS 明朝を使用する（和文）。欧文の場合、Times New
Roman を使用する。
3. 原稿・図版類の入稿形態について
原稿は、テキスト形式を基本とし、図版類は JPEG 形式な
ど汎用性のある形式でのデータ提出とする。その他のデー
タ形式での入稿は、編集委員と協議する。
4. 使用言語は日本語、英語、中国語を基本とする。
5. 文章表記について
度量衡単位は cm、kg、m³等のように記号を、数量は算用
数字を使用する。
6. 註・参考文献について
註は通し番号を付し、文章末尾に一括して掲載する。本
文中の参考文献は執筆者と刊行年を明記し、引用箇所が明
確な場合はそのページ・行数を参考文献とともに記入する。
7. 挿図・写真図版について
 - a. 挿図はデジタルトレースまたは手書きトレース済みの
完全版下とし、縮尺・写植・見出しなどの指示を入れる（写
真図版も同様）。
 - b. 編集作業を潤滑におこなうため、割付見本を作製する
こと。
 - c. 挿図および表は典拠を明記する。但し執筆者自身の原
図・表の場合には断る必要はない。
8. e-mail アドレスを論文末尾に掲載

『金大考古』編集委員

小川光彦（金沢大学大学院生）、垣内光次郎（石川県埋蔵文化財
センター）、勝俣竜哉（御殿場市教育委員会）、小松隆史（井戸尻
考古館）、酒井 中（金沢大学大学院生）、桜井秀雄（長野県埋蔵
文化財センター）、佐々木達夫（金沢大学教授）、庄田知充（金沢
市埋蔵文化財センター）、高濱 秀（金沢大学教授）、野上建紀（有
田町歴史民俗資料館）、前田清彦（鯖江市教育委員会）、八木 聡（金
沢大学大学院生）渡辺芳郎（鹿児島大学）、渡邊玲（金沢大学学
部生）

金大考古第 66 号

金沢大学人文学類歴史文化学コース
大学院人間社会環境研究科
考古学研究室
920-1192 金沢市角間町
kanazawa-u_kougogaku@live.jp
2010 年 5 月 30 日
